

## 関口忠司と宮田篤+笹萌恵

ゲスト：渡邊早葉・野村勇作（社会福祉法人みぬま福祉会）

共感と驚き—それぞれの日常がつながるとき

—今回は「日常アップデート」展の出品作家である故・関口忠司さんと、同じ展示室で発表している宮田篤さんをめぐるトークを公開収録でお届けします。ゲストには、関口さんが所属していた社会福祉法人みぬま福祉会から、渡邊早葉さんと野村勇作さんをお迎えしました。また、宮田さんはあいにくご都合がつかなかったのですが、共に活動している笹萌恵さんがいらしてくださいました。まずは渡邊さんたちから、みぬま福祉会についてご紹介願えますか。

渡邊：みぬま福祉会は、障害者福祉を中心にした事業を行っています。1984年に埼玉県で創設され、当時、養護学校卒業後の行き場がなかった方々のために、その家族や先生たちが立ち上げたのが始まりです。そこでは仲間たち（利用者）が余暇活動を中心に、軽作業の仕事もしていました。一方、そうした作業も難しい、または拒否するような仲間ができることを模索するなかで「表現活動」が始まりました。

あるとき、軽作業のできない仲間のひとりに、お祭りのチラシに絵を描いてみないかと声をかけたんです。するとすごく楽しそうに描いてくれて、これがきっかけでした。いまは全利用者の約300人のうち150人によって、絵画、機織り、ステンドグラス、木工、陶芸など、日々さまざまな表現が生まれています。現在、こうした表現活動は同法人内の施設「工房集」（こうぼうしゅう）を中心に行っており、関口さんは重い障害のある仲間の入所施設「大地」で書に取り組むようになりました。

野村：僕はその大地で入居者支援の仕事をしています。関口さんの創作は、いつも面白いこと書いているなという感じで見ていました。大地は入所型の生活施設でもあるので、今日は関口さんの仕事以外のエピソードもお話できたらと思います。

—ありがとうございます。続いて、宮田篤さんとユニットで活動している笹萌恵さんです。

笹：よろしくお願ひします。私と宮田はそれぞれ個人で活動しながら、2010年くらいから2人での活動もしています。今回は、宮田が会場で展開している「びぶんぶ

ックセンター」に運営の役割で参加しています。2人ともワークショップでいろいろな人と何かをつくることが多く、その「仕組み」や「仕掛け」を考えることから行っています。

今回の「びぶんブックセンター」は、《微分帖》というワークショップの発展と普及を目指すというコンセプトで、文化センターの「ふり」をして展開しています。自分たちの作品をきっかけに、参加者のみなさんの間で重なる部分や、ちょっとずれる部分が見えてくるのが面白いと思っています。

### 間違いや失敗にも楽しさを見出す

—関口さんは残念ながら昨年お亡くなりになり、本日お越しいただくことは叶いませんでした。そこで彼について、渡邊さんと野村さんからお話いただけますか。

野村：僕が関口さんと出会ったのは、10数年前、大学の実習で「大地」にお世話になったときです。人懐こくて、誰にでも話しかけるような人でした。実習中もいろいろ学ばせてもらい、その後も「お散歩に付き合っ」といった連絡がきて、彼に頼まれると「しょうがないな」という気にさせられちゃう、そんな人でした。

やがて僕も大地で正式に働き始め、関口さんがいろいろ武勇伝を繰り広げている人だと知りました。例えば、今回展示された書のひとつに《エレベーターさわぎ》がありますね。大地では月に1回ほど、業者点検で「エレベーターを1時から2時まででは使わないでね」という日があります。そういうときに関口さんがいなくなって大騒ぎしていると、点検が済んだエレベーターから出てきたのが関口さんでした。またふだんから、おイタをして怒られた話を楽しそうにするのですね。「コテンパンに怒られちゃったよ。あ、コテンパンっていいな、書いてみよう」という感じですよ。

ときには聞き間違いや書き損じが作品になることもあります。《つまがいた》はその背景をいろいろ想像させるのですが、実は「つまずいた」の書き損じでした（笑）。でも彼は「つまがいた、いいね」と言っ。他にもテレビで「汚職事件」という言葉を聞いて「おしょくじけん（お食事券）か、いい響きだな」と書いてみたり。そうした彼の人となりが見られている作品も多いと思います。

—今回、宮田さんと笹さんには、そんな関口さんの作品と同じ空間でコラボレーションしていただきました。

笹：この展覧会において、宮田には自分の展示空間を架空の文化センターにするというコンセプトがありました。そこで関口さんとのコラボレーションも、この「びぶんブックセンター」における交流事業という位置付けにしています。そこからいろいろなアイデアも出ましたが、やはりシンプルに関口さんの書を受け止めたいとなりました。同じ展示室でこそできる体験として、関口さんの書の言葉のあいだに、私たちが書を加えていく《びぶん書》をつくる試みにたどり着いたのです。

《微分帖》は4つに分けたページをベースにつくっていくので、関口さんのシンプルで力強い言葉を分けることの難しさもありましたが、今回は《ときはすぎゆくままに》を選ばせていただきました。おそらく「時の過ぎゆくままに」という歌からきていて、「の」が「は」になるのも関口さんらしさかなと思ったのです。そこに宮田と私で言葉を加えさせていただきました。できれば会期中、皆さんにも関口さんの書に飛び込んでいただくイベントを用意できたらと思っています。

### 自分、そして他者と向き合える表現

—今回は関口さんのたくさんの作品から、工房集さん、宮田さん・笹さん、そして私たち渋谷公園通りギャラリーの者が、それぞれ選んで展示させていただきました。まず工房集で選んでいただいたものを読み上げてみます。《ふめつ》《まぐれ》《じんとく》《であい》《なごむ》《ぎんが》《むがむちゆう》《ちゆうぶらりん》《なるしかならない》《どんぴしゃり》《のうてんき》《すいへいせん》、そして《まぼろし》《はるかかなた》《つぶやき》です。

渡邊：関口さんはいろいろ問題を起こしても、とても愛されるキャラクターの持ち主だと聞いていましたので、そうした人となり伝わればと思いながら選んでみました。関口さんにもいろいろな面があると思うのですが、今回は彼の前向きな言葉というか、そういうものを選ばせていただきました。一方で、なかにはそんなに前向きではないような言葉もありますよね。

野村：僕が関わり始める前に、少し不安定な時期もあったようです。何をしてもう

まくいかず、障害の進行によって杖を、さらに車椅子を使うようになったころ、自己肯定感を持てずにいたらしいのです。そんなある日、筆を持たせて、ちょっと書いてみたらと言われて始めたのが書なんです。それが評価されていくことで自己肯定感を取り戻し、少し不安なときも、よし、書いて落ち着こう、ということがあったようです。辛いときを乗り越えるために取り組むひとつのツールでもあったのだと思うし、いろいろな気持ちで書に向き合っていたのではないのでしょうか。

—続いて、宮田さんと笹さんが選んだ関口さんの作品も読み上げさせていただきます。《カクテル》《今とりこみ中》《どぼくかんけい》《ときはすぎゆくままに》《ニャンニャン村》《かしこ》《けっぱくをあかせ》《みそっかす》《ある日のできごと》《とべ》《まったくもう》《もうやりきれない》《アウトロー》《おおぼけこぼけ》《とびきりじょうとう》《全はいそげ》《雨がしとしとうとうしい》《けりをつける》。

笹：宮田と私が選んだ作品には、例えば関口さんが筆を洗わずに使い続けていたと聞いて、その筆先の感じに注目したのがあります。また、周囲から聞こえてきた言葉もキャッチして書にすると聞いて、そのときの関口さんを思い浮かべてつい微笑んでしまうようなものも選んでいます。素敵な言葉が多く、ネガティブな言葉もどこかトボけた感じがありますよね。一方で、ちょっとかっこいい感じや、鬼気迫る感じ、かしこまった感じのものにドキっとする。そうしたものも選びました。

身近で小さなことから、すごく壮大なことまで、言葉のチョイスの振り幅も魅力だと思います。私がすごく好きなのが《ニャンニャン村》です。それが何なのか全くわからないけれど、愛しい気持ちになるし、行ってみたいなと思える。そして今回、関口さんの書をたくさん展示する、つまり見る側が受け取ることは、手紙のような側面もあるかなと思ったとき、締めくくりに《かしこ》がくるのもいいかもしれないと思いました。

—その《かしこ》に対応するように、工房集さんが《であい》を選んでくださっていましたね。そこで関口さんの展示は、《であい》で始まり《かしこ》で終われたらと考え、この2点は展示壁の背景色を変えています。

笹：3者それぞれで選んだものが、ほとんど重ならなかったのも面白いですね。見に来てくださる方々も、引かれるものはそれぞれ異なるのでしょうか。また、関口さん

の書と、私たちの《微分帖》に共通するのように感じた部分もあります。《微分帖》では、自分で書いたことが普通だなと思っても、受け取る側には新鮮だったり、リアリティを持って相手の世界を感じられたりすることがあります。関口さんの書も、見る側がハッとさせられたり、お人柄を感じたりするものが多いですよ。

野村：関口さんは展覧会などに際して、実演販売というかたちで、お客さん側のリクエストした言葉を書くこともありました。ただ、頼んだところでオーダーしたものが上がってこない（笑）。お話ししながら、いつの間にかちょっと違う言葉を書いてくれたりして。だったらもう、関口さんが相手に感じたものをそのまま書いたらよいのでは、となったのですね。気分が乗ると「好きなものは何ですか」「お花が好きかな」といったやり取りから「はな」と書いたこともありました。

### 交差する日常の先にあるもの

—今日お越しになれなかった宮田篤さんから、メッセージがあるそうですね。

笹：はい、私のほうで代読させていただきます。

「本日は貴重な機会をいただいたにもかかわらず、そちらに伺えず申し訳ありません。おかげさまで同じ展示室の仲間として、あるいは言葉をモチーフのひとつにする作家同士として、ふたつの作品が共有する、ここにしかない場所を作ることができたのではないかなと思います。また、今回はコラボレーションの機会もいただきました。もしも関口さんに会場へお越しいただけたら、どんなお話をされただろうかと考えます。あるいは一緒に『びぶん書』をしたら、どんな言葉を書いてくれるのか、書いてくれないのかなど、「びぶんブックセンター」で店番をしていると、ふと考えることがあります。関口さんの書を鑑賞するにあたり、何の言葉を書いたか、どう半紙に墨で書いたかに加えて『びぶん鑑賞体験』を加えられたことは、我々ユニットとしてひとつの達成になりそうです。ご協力いただいた皆様にこの場を借りて改めてお礼申し上げます。」（当日読み上げられたメッセージから抜粋）

—この展覧会は日常をテーマにしたものなので、関口さんの作品にある数々の言葉を拝見したとき、今日もお話にも出た、聞き間違いなどからも作品が生まれること

に、私は強い関心を持ちました。そういうことってふだんもあるな、と思ったのですね。例えば、私はかなり大きくなるまで、換気扇のことをずっと「換扇機」（かんせんき）と言っていたんです。そのことも関口さんのエピソードとちょっと重なり、言葉で日常を感じられる作品の魅力を感じて、お声がけさせてもらいました。

一方で、宮田さんの《微分帖》は、人と人とのつながりで、ひとつのものをつくり上げる。これも、日常ってそういうものだなという気持ちがあって、お声がけしました。そのうえで、両者とも言葉を使う作品同士ですし、同じ部屋で一緒に何かできるといいなと思ったのですね。

渡邊：じつは最初にそのコラボレーションのお話を聞いたときはイメージがわからなくて。関口さんの作品はそれ自体で完結しているので、そこに他の作家さんがコラボレーションするというのは、どういうものになるのか心配だったのが正直なところ（苦笑）。でも実現してみると、こういう表現もあるのだなという新たな発見をさせてもらえました。今までにないことで、とても新鮮で良かったと思います。

笹：そう言っていただけて、ほっとしています。先ほど、関口さんからお手紙を受け取るような気持ちもあったとお話しましたが、同時に、私たちがそのお手紙にお返事を書くような気持ちもありました。関口さんの言葉を受けとめ、そこに自分たちの言葉を、世界を、少し加えていくような感覚です。そして、もし関口さんがそこへさらに何か加えてくれたなら……と想像することもあります。渡邊さんと野村さんにも、ぜひ関口さんの作品との《びぶん書》をご体験いただけたらと思います。

—今日は皆様、ありがとうございました。